

ワンパン世界にほむほむ（憑依体）がIN

政田正彦

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「どんな敵でもワンパンつてチートじゃないの」

「時間止める奴に言われたくねーよ」

「その時間を止める盾をよこ、いや、貸せ。必ず返す」

「嫌よ」

ヒーロー名【時魔女】

「……敢えて言わせてもらうけど、魔女じゃないわよ。魔法少女よ」

「何が違うんだよそりや」

こんな感じの話。

隕石編

ヒーロー名：時魔女

時を止める少女

海人族編

深海からの脅威

深海の王

目

次

38 25 15 1

## 隕石編

### ヒーロー名：時魔女

この世界には、漫画やアニメ、映画の中に存在するような怪人や、それから一般人を守るヒーローという存在が仕事として実在し、ヒーロー協会という名の、ヒーローを束ねる組織が存在する。

ヒーローには階級が存在し、認定を受けたばかりの駆け出しであるC級を始めとし、名が売れ始めたB級、そして一級のプロヒーローとして一人前になつたA級。

……そして人外染みた圧倒的な力を持つ変態級のS級が居る。

S級3位のヒーロー、「時魔女」ときまじょもまた、S級ヒーローとして目覚しい活躍で世間から絶大な支持を得ているS級ヒーローの一人だ。

学校の女子制服のような服で鋭角的なデザインの紫と黒を基調とした衣装に身を包み、身長は155～158cm、さらりとした黒髪を三つ編みにし、頭に赤いリボンを着け、『生まれ持つた』能力で誰よりも早く現場に駆けつける。

年齢は中学生程度だろうか？S級ヒーローの中では童帝がS級ヒーローになるまでは最年少の美少女S級ヒーローとして一躍有名になり、その可愛らしく凛とした風貌にメディアも彼女を放つて置かず、すぐに彼女に関するグッズが販売され、飛ぶように売れていた等といつた逸話が存在する。

さて、そんな彼女だが……その正体は、全く別作品、「魔法少女まどか☆マギカ」に登場する最重要キャラクターの一人、「暁美ほむら」その人……ではなく、彼女の外見と能力を転生特典として手に入れた転生（憑依）者であり、戸籍上の名前も暁美ほむらという。

その上ワンパンマンという漫画の、原作の存在を知っているというおまけつき。

ついでにジエノス推しである。

その日、時魔女こと暁美ほむらはとても緊張していた。

普段から、『魔法少女』に変身していないと不安感から自信が無く、おどおどしがちなのだが、それに輪をかけて緊張しつぱなしであつた。

前述の通り彼女はジエノス推しである。

そして今、彼女はワンパンマンの漫画版第23話で登場する巨大隕

石の件でヒリロリ協会Z市支部に訪れているのだ

原作通りながらは……といふかはは確實に  
シニノアはここへ詰れる。

……まあ実を言えばこの世界のジエノス自体は、映像で見ているから初見ではないのだが……実際に会うのはこれが初。そして顔を合わせるという意味でも。

「(よし……まず挨拶から……)」

そう意気込んでいると、不意にドアが開く。

来たか!?と振り向き、そして意中の人ではない事に若干がっくりとしながら、それをおくびにも出さずにその者に話しかける。

「おお、寺贋アラヤー、さつすくつす

「バングさんも来たんですね」

バング。S級ヒーロー第4位の、ほむらとはまた別の、正当かつ純粹な武の強さを極めた、本物の実力者である。その老体からは考えられない程に流麗な流水岩碎拳という武術と重い一撃は怪人を圧倒し、弟子入りを志願する者は後を絶たない。

「……一応聞くんじゃが……他のS級ヒーローは？」

た」  
うなうかうて  
あと  
二番のノ道は今貢通獎しがいござい

「避難じやと？ おいおい、一体何があつたと言うんじや」

S級ヒーローは基本招集をかけられても来ないことがそう珍しく

ない。場所が遠かつたり、ほかの事で忙しかつたり、単純にめんどくさくて来ないという薄情者も居る。

しかもS級ヒーローが召集されるのは大抵、面倒事、無理難題を押し付けられる、厄介事の処理であつたりするのも原因の一つである。だがいつもの事なのでバングもそこには突つ込まなかつたが、流石に支部に人が居ないというのはどうなんだ。

「巨大隕石、だそうです。S級ヒーロー達にどうにかしてほしい、と」「なんじやあそりやあ……」

「これがその巨大隕石だそうです」

ボリボリと頭を搔きながら呆れたと言わんばかりにそう呟くバングの表情は明るくない。一瞬で、隕石をヒーローの手で解決することで、ヒーロー協会の名を売ろうという意味も兼ねているのだろうとう意図まで透けて見え、そしてほむらから渡されたデータを見て「あ、これ無理」と諦めた。

今回の隕石の災害レベルは竜。“いくつもの街が壊滅する危機”を意味するその災害レベルは5段階ある災害レベルの内の中から二番目だ。

「こりや無理じやのう。お前さんにはどうにか出来そうか?」「流石に無理ですね……」

S級第3位と4位が集まつてもなおその結論が覆ることはない。ちようどそんな話をしていると現れた者が居ても、それは変わらないだろう。

「ほう、もうひとり来たようじやな」「(えつ!?)」

バングに気を取られてすっかり気付かなかつたが、その者の背後の自動ドアが丁度閉まる瞬間だつたことを鑑みるに、まだ来たばかり

だつたようだ。

「君は……新しくS級ヒーローになつた期待の新人ジエノス君か。わ  
しはバングというものじや。よろし、」

「（バング……S級4位のヒーロー……本物の実力者だ）」

と、非常事態なものもあつて自己紹介をさつさと済ませ、んで、と隣に居るほむらに紹介を促すバングだつたが、何故かほむらが一向に口を開こうとしないので、ん？とほむらの方に顔を向ける。

「（あ……あわわわ……かかかか、カア～～ツコイイ～～!!リアルジエノスマジでかつこいいよお………）」

「……時魔女ちゃん？」

「（ハツ！）あ、ええ、ええと、暁美ほむ、じやなかつた、時魔女です。  
よ、よろしくお願ひします、ジエノスさん」

「時魔女？S級3位の時魔女か……!?（こんな少女が……!?)」

バングはまだ分かる。老人とはいえその男が身に纏う武に慣れ親しんだ雰囲気は、武術に関しては素人に近いジエノスでも空氣で分かる。

だがその隣に居る少女がそのバングよりも上だというのはどういうことだ？それに、サイトに載っていた時魔女とは雰囲気がまるで違う。

S級第三位の時魔女はその人気とは裏腹に、S級の中でも謎の多い人物である。

彼女に関する話では、「怪人の下に誰より早く訪れ、そして一瞬で相手を殲滅してしまう」とか、「向こうの市で活動していたかと思つたら、いつの間にかこの市に居た」という話が数多く見られた為、ジエノスは「時魔女とは超スピードでの戦闘で敵を一瞬の内に殲滅してしまふヒーロー」だと思つていた。

……だが実際に会つてみるとどうは思えない。

いたつて普通の生体反応、緊張氣味で浅い呼吸、肉体という面で見ても……足のつま先から頭のてっぺんまで、どこからどう見てもただの少女にしか……。

いや、先生と同じで見た目では分からぬ強さというのもある……少女だからと言つて悔れないだろう、とジエノスは考えを改め、ひとまずは彼女を味方と受け入れることにした。

「そうか……俺はジエノス、よろしく頼む……それで、ヒーロー協会に招集で呼ばれたんだが……」

かくかくしかじか。バングとほむらはジエノスに35分後に隕石がここに落ちてくること、30分前までは落下地点を予測して報道することを伝えた。

「というわけで、君も誰か大切な人と共にここから避難したほうがいい」

「お前たちはどうするんだ？」

「わ、私はその……避難のお手伝いをしようかと思います」

「わしは代々受け継いできた道場を離れるわけにはいかんから、残るしかないのう……ところでジエノス君」

バングはそう言うとシユバツと流水岩碎拳の構えを見せながらこう尋ねる。

「流水岩碎拳……知つてる？」

「あの、バングさん。ジエノスさん、もう行つちやつてます」「……そつか」

ついでにほむらも、じゃあ私も行きますね、とその場から立ち去つた。

ジエノスはバング達と分かれるやいなや、Z市 の上空で隕石の落下予測地点へと向かっていた。その手には、試作品の新兵器が装着されており、これを使用した上で焼却砲のフルパワーでどうにか迎撃出来ないかと考えている。

隕石はZ市だけでなく周囲の街へも壊滅的な被害を及ぼすであろうサイズのものであり、今から避難したところで、間に合わない。

なによりZ市には彼の師も住んでいる。自分で逃げ出すわけには行かなかつた。

……そして、そんな彼の横を通り過ぎていく大きな鉄の塊があつた。

「（あれは!?）

それはブースターの逆噴射で勢いを殺してビルの屋上に着地すると、隕石を眺めて何やら計算をしているようだ。

「……お前は、ボフオイだな!？」

ジエノスも遅れてその場に到着すると、それがなんだつたのかが分かる。それは、S級ヒーロー第7位、高火力の兵器で敵を周囲ごと粉碎するヒーローだ。

「オマエハ、新人ノジエノスカ」

「ああ。ボフオイ、お前の力を貸してくれ」

「……断ル」

「なぜだ」

ジエノスは、ボフオイもZ市に住んでいたのか、命を張つてやつてきたのだろうかと考え、彼に協力を求めたが……それは間違いであると本人の口、いや、本人の操作するロボットの口から明言された。

彼はただ隕石を相手に新兵器の実験がしたいが為に訪れただけで

あり、さらに言えば今ジエノスと話しているのはボフオイ本人ではなく遠隔操作で動くロボットだ。

「残念ダガ、俺ハ命ヲカケテル訛ジャナイ。隕石デ死ヌノハゴメンダ……アト、俺ノ事ハボフオイデハナクメタルナイトト呼ベ。ヒーローハ本名ジャナク、ヒーロー名デ呼ベ、常識ダ」

……と、話している場合じゃなくなってきたようだな、とメタルナイトは言いながら空を見上げる。そこには隕石がもう姿まで見えるほど近づいてきていた。

ジエノスは無駄に時間を使つたと言わんばかりにその場を離れ、隕石の落下地点の真下にあるビルまで跳躍した。

「あら、遅かったわねジエノス…………さん」

「時魔女!?

そこには、何故かジエノスよりも先にさつきまで支部で話していたはずの、そして避難勧告に行くと言っていた時魔女の姿があつた。「(こ)いつ、少なくとも俺より遅れて支部から出たハズ…………どうしてここに!?というかいつの間に着替えた!?!?」

「どうしてここに、と聞きたげだけど…………それを話している暇は無さそうよ」

自分より早く到着している事、着ている服が全く異なる事、そしてなにより彼女が身に纏っている雰囲気や口調がまるで違う事から、やはりこいつも只者じやないとジエノスは思つた。

そしてそんな彼女もまた、隕石を止めに来たようだ。避難のお手伝いをします、と言つていたはずだが、避難も無駄だと市民達も悟つたのだろう。

ともかく、メタルナイトよりかはまだ好感が持てそうだ。

「そろそろね」

「ツ!!」

そう彼女が口を開いた瞬間、隕石に向かつて無数のミサイルが発射される。

「メタルナイト……!?」

弾道からその発射地点を見るとそこにはメタルナイトが居た。焼却砲を発射しようとしていたが、タイミング的に今からでは逆に邪魔になつてしまふ。

そして、ミサイルが着弾する。

瞬間、空で爆発したというのに衝撃波で地面が揺れる程の爆発が巻き起こる。

「（…）この威力…………！？あいつ…………こんな兵器を…………（…）これがもし隕石ではなく街だつたら…………！？あいつは危険だ。警戒しなければ…………！」

爆発が止み、爆煙が空に漂っている…………そして程なくしてその煙からまるで勢いが死んだ様子もない隕石が顔を出す。

「!?…………ダメか！！」

流石にあの爆発の直撃なら、と、どこか期待してしまつたが、上手く事は運んでくれないらしい。

「（どうする、もうあまり時間がない…………チャージまで5秒、隕石はあと30秒で地面と衝突する…………いや攻撃が命中したとしてその後はどうする。というかそもそも俺のパワーでアレを破壊できるのか？）」「まあ落ち着け」

声をかけられ振り返るとそこにはいつの間に居たのだろう、バングがそこに立つっていた。

「心に乱れが見える。お主はまだ失敗を考えるには若すぎるのう。適当でえんじや適当で。土壇場こそな。結果は変わらん。それがベストなんじや」

「(……適當がベスト?)」

そこでジエノスの脳裏には、自分の師の姿が浮かんだ。

不意にジエノスの胸部装甲が開き、中からコアらしきものが取り出される。青白く光り輝くそれを、腕部に装着し、手を隕石へ掲げた。

「時魔女、バング、伏せていろ」

「ほ?」

「分かったわ」

適當がベスト。後先のことはどうでもいい。失敗等考えない。ジエノスは隕石に今ある全力を捧げる事にした。

そして、ジエノスの腕から隕石へ向かつて、フルパワーの焼却砲が放たれ、地面から空に、一筋の光の柱が立つた。

「うおおおおおおおおおおおお!!!!」

全身全霊を捧げた、今のジエノスに出来るうる限り最高の一撃……だが。

「ダメだ!! とても破壊できるような物じゃない!!」

「いや! 気のせいいか隕石が勢いを落としているように見えるぞ!」

「本当か!?」

「あ、気のせいじゃった」

「くそじじいめ!!」

やがてフルパワーの焼却砲も虚しく、エネルギー切れで膝をつくジエノス。

もう起き上がるエネルギーも残っていない。

「残り9秒……逃げろ、二人共」

「そこの二人、そいつのこと、任せるぞ」

諦感が心を支配しようとしたその時、背後から見知った声がした。まさかと思いジエノスが振り返ると、そこには今まさに飛び立とうとしている自分の師匠……サイタマの姿があった。

「だ、誰じゃね君は？」

「よくわからぬけど任されたわ」

瞬間、ドムツという重い音が鳴つたかと思うと、遅れて彼が居た場所に蜘蛛の巣状のヒビが入る。

「先生!？」

「（あれがサイタマさんかあ……いや、実際に見るとやっぱ凄いな）

そしてサイタマは隕石を睨みつけ……

「俺の街に」

拳を硬く握り

「落ちてんじや」

その勢いのまま

「ねえ!!」

拳を振り抜いた瞬間、今日一番の轟音と共に、その一撃は隕石を貫通し、隕石は爆発四散した。

「嘘でしょ……!?」

「砕きおつた!?」

初めてその力を見るバングも、原作を知り、彼のマジ殴りの威力も知っている彼女でさえ、その光景には「冗談だろ」と叫びたくなった。ただの人間の一撃が隕石を碎いたのだからそもそも言いたくもなる。

「……だが……！」

だが、これで万々歳では終わらなかつた。隕石は碎けたが、碎けて小規模な大きさになつただけで、隕石そのものはまだそこに存在する。

大いに威力は低減したとは言えこのままだと乙市は……。

「ジエノス君、そのままそこを動くでない。わしが守つちやる」

「その必要はないわ」

「なぬ？」

今まさに降り注ごうとする小隕石を前にして、反動で動けずにいるジエノスと、そんな彼を守ろうとするバングに、いつの間にか前に立つていたほむらは、守る必要はないと断言する。

「それはどういう……」

いつの間にか、ほむらの手には一つの黒く輝く弓が握られていた。一体どこから取り出した、と疑問に思つたのも束の間……ほむらがその弓を引く動作を見せたかと思うと、弓からキラキラと炎が吹き出

し、弓にはいつの間にか光で構成されたかのような矢がかけられていた。

「……教えてあげるわ」

——奇跡が存在するように……魔法だつて、あるんだよつてことを。

そして、空に向かつて一本の矢が放たれる。

そう、少なくともジエノスがそれを見たときには一本の矢でしかなかつたはず。

だがそれは、どういう原理か、まるで枝分かれするように分裂し、吸い込まれるように次々と小隕石に着弾する。

分裂した隕石の対を成すかのように展開された弾幕は次々と小隕石を打ち抜いていき……殆どの隕石はパラパラと殆ど無害な砂利サイズまで粉碎され、余熱で空中で消えるか、地面に落ちても、勢いが死んでいるのもあつて、殆ど被害を出さなかつた。

撃ち逃しを時間停止で確認しつつ執拗に撃つたのだから当たり前とも言える。

結果として、今回の隕石騒動で出た被害者は0。

被害は、窓ガラス数枚と交通標識が一つ折れたこと、そして衝撃波によつて道路やビルが損壊した程度の、まさに奇跡、まるで魔法と言える程に軽微な被害に抑えられたのだった。

……いや、一人だけ、甚大な被害を被つた者がいる。

それは……。

「先生――無事でしたか！」

「あら？あなたさつきの……」

さて、帰るか、と踵を返した時、スタッツ、と彼女達の前に着地した者が居た。

先ほど、隕石を碎いた一撃を放つた張本人である。

「さつきの光のパアーツてやつ、お前か？」

「そりだけど……それが何？」

ほむらは原作とは違う彼の行動に首をかしげながらそう聞いた。そしてサイタマは何故かぷるぷる震えながら、くるつ、とケツを抑えながら後ろを向き、そしてこう言つた。

「……お前の技で服が破れちまつたから、弁償してくれ」

サイタマのヒーロースーツの、よりもよつて臀部が、おそらくは隕石を打ち抜いて貫通した矢に当たりかけた、あるいは当たりはしたのだろう。その結果、服が……破れていた。

しかも、マントごとである。

綺麗にそこにだけ大きな穴が空いており、“そういうアホっぽいデザイン”だと勘違いされかねない程に、そして隠しようもなくなつている程に。

「…………」

「……いや……違うんだよ？俺だつて、悪意があつたわけじやない事は分かつてんだよ。だからなんだ……こんな事言いたくも無いんだけど、その、なんだ、アレだよ……なんつうか……」

「あの、先生……とりあえず俺の服……はさつき破いてしまつたんだつた……ッ！」

「今はその破れたやつでもいいからくれ」

なんとも締まらない……そしてアホらしい幕引きになつてしまつた上に、これが時魔女、暁美ほむらとサイタマのファーストコンタクトだと言うのだから始末に負えない。

ほむらとしても、まあこれくらいじゃサイタマは死なないでしょとタカをくくっていたのもあり、この事態は想定外だった。

ほむらは数秒放心したあと、「分かつたわ」と後に連絡と弁償するために、彼の住所を教えてもらつた。

結果的に次に会う予定が出来たのはよかつたと言えるかも……しない。

## 時を止める少女

「お？」

「あつ、ど、どうも」

隕石の件から三日、ほむらは伝えられたサイタマ宅へ、修繕費とお詫びのしるとして、上級お肉セットとお菓子を手にサイタマの家に訪れたが、丁度出かける所だつたらしい。

「お前は……えーと……」

「あつ、私は暁美ほむ、じやなかつた、時魔女というヒーローです。その、3日前に隕石の件であなたのヒーロースーツの、その……お尻りの部分に穴を開けてしまつた、ので、その修繕費と、お詫びの品を……」

サイタマは今からパトロールに行くつもりだつたのもあつて、流石にそのことを忘れてしまつたわけではなかつたが、肝心の時魔女がこんないたいけな中学生だつたという記憶は無かつた。

これは普段忘れっぽい彼だから、という訳ではなく、純粹に魔法少女じやない姿での対面は、これが初めてだからである。

「お、おー……悪いな、なんか。つてこれひよつとして肉？肉じやん！ よっしゃあ！」

……そして、彼女がお詫びにと持つてきた肉セットでそれすら忘れたらしい。

「じゃあ、なんだ、せつかくだし上がつてく？」

「いいんですか？」

「いいよ。どうせ三日前のノルマは達成してゐるしな。あと、今日の飯が鍋に決まつたから、お前も食つてけ」

そう言うサイタマはどこかご機嫌な様子だつた。確かにこのタイミングだと、C級五位にまで上がつていたはず。そして「アレくらいでランク上がるなら、パトロールでもしてみるか」という流れで外出

する。

そして本来なら、碎いた隕石の破片によつてZ市が崩壊し、その責任を擦り付けられたりといったすつたもんだがあるのだが、この世界ではほむらの助力により、Z市の被害は最小限に抑えられている為、Z市は今も健在だ。

…………とは言え、怪人の出没率が段々上がつてゐるのが原因で、若干の過疎化の気配が漂つてゐるのだが。

そしてこれは単なる補足だが、この世界での現時点でのサイタマはC級五位ではなくC級二位まで上がつてゐる。

些細な差異だが、これは、協会への隕石事件の詳細について報告する際、ほむらがサイタマの実力に関して正しく協会に伝えた為、協会が彼がインチキなのではというデマ情報に踊らされる事が無くなつた為だ。

ほむら本人には彼のデマを払拭するというような意図は無かつたのだが、そもそも、事態は誰の目から見ても明らかに解決している為、自由奔放なS級ヒーローは基本済んだことの報告等しない。

変な所で生真面目だったほむらは、今回の一番の功労者であるサイタマの名前を報告し、その結果協会は「わざわざ報告する程サイタマというヒーローの活躍が凄かったのか」と、S級ヒーローの中でも、中学生ということ以外至つて常識人なほむらの勝ち取つた信頼が、素直に協会に功績を認めさせるに至つた。

だが、それでも、やはり現場に三人もS級ヒーローが居た事もあって、サイタマよりその三名に上層部の目が向いてしまつた。

彼にデマや悪評が流れるることは無くなつた。

だが上層部がそんな彼とほむらの齎した情報を大して氣にも止めず「やつぱりS級に任せておけばなんとかなるもんだな、え? C級も現場に居たの? しかも結構活躍した? ふーん、でもS級が居たからでしょ?」という評価を下してしまつたが為に、サイタマはまだC級止

まりでいる。

さて、話を戻そう。

いつになくご機嫌なサイタマによつて夕食の鍋に誘われたほむらは勧められるがままにサイタマ宅へ入つていく。今更だが成人男性二人が住む家に女子中学生が一人で訪れるというのは犯罪臭が凄いが、原作のほむらはこの比ではない事（軍事施設から重火器を奪つたり住居に不法侵入したり）をここで追記しておく。

「ん？お前は……」

「あれ？ジエノスさん、どうしてここに？」

「俺は先生の弟子だからな。こうして先生からあの強さの秘密を学ぼうとしている」

無論、ほむらもそんな事は百も承知ではあるが、いちいちこうして「自分の知るはずのない情報は聞かなければならぬ」というのが、原作知識を持つた者のめんどくさい点でもある。

……が、ほむらは「今！私！ジエノスさんと会話してるう！」と嬉々として「隕石を割った力は凄かつたですもんね」とか「ジエノスさんはどうしてヒーローになつたんですか？」などと聞いている。

サイタマは、ほむらからもらつた菓子を頬張りつつ、あのジエノスのマイペースな長話を嬉々として聞く奴が居るとはなあ、と若干驚いていた。

「それよりお前あんときと雰囲気違いますねーか」

……と、同時に、当たり前とも言える、むしろ何で今まで聞かず聞いたのか不思議なほどごもつともな疑問を抱いていた。

「それはその……」

「俺も気になつていた……何故わざわざあの格好に着替える必要がある？」

「き、着替え？あれは着替えてるんじやなくて、その……私の持つとある？」

「き、着替え？あれは着替えてるんじやなくて、その……私の持つとある？」

る能力に関係するんです」

「能力う？」と首を傾げるサイタマ。こういつてはなんだが……全く信じていないうだ。一応その力の一端である光の矢のせいでこうなっているのだが。

「サイタマさんとジエノスさんさえよければお話ししますよ」

別に確認を取るまでもなく、魔法少女に変身できる事や、その他の魔法についてのことも、この二人になら話してしまつても構わないだろうと思う暁美ほむらだが、原作知識で、サイタマは長い話を嫌う傾向にあることを知っていた為、念の為に聞いておく。

「…………その話長い？」

聞いておいて良かつたようだ。

サイタマとしては、一応はこうなつている原因でもあるし、何よりも知らないままだとすつきりしない。どうしても知りたいというわけじやないが、聞いておいたほうがいい気もする。

「頼む」

一方でジエノスは意外な事にほむらの持つ能力というものに興味津々だつた。なにせ自分のフルパワーをもつてしても碎けなかつた隕石を、碎けたあと的小隕石であるとはいえ、粉々に粉碎し、本来出るかもしれないなかつた小隕石による余波の被害を食い止めたのは彼女の能力の物であると理解していたためだ。

二人がほむらに目を向ける中、ほむらはコホンと咳払いした後、二人にこう告げる。

「私は魔法で色々な事が出来ます」

「…………えつ、説明終わり？」

説明終了である。それに対しても満が出ると思つていなかつたのか、ほむらは首を傾げていた。てつきり、「ふーん」とか「へー、そーなんだ」程度の反応だと思つていたのだが。折角二十文字以内に収めたというのに。

「もつとこう、具体的に教えてくれないか？特にあの光の矢の事とか」「（や、やだ、近い……）えつと……じゃあ変身見ます？」

「おう、あとその魔法？とか言うのも見せてくれ」

「わ、分かりました」

ジエノスの意外な食いつきように、顔を赤らめながらほむらは変身を見ることにした。とはいって、特殊な準備は必要ない。変身には彼女が常日頃肌身離さずもつてているソウルジエムが必要だが、逆にそれ以外は何も必要ない。

「あ、着替えるならそつちで」

「ああいえ、大丈夫ですここで」

ほむらはそう言うと、メガネを外し、懐からソウルジエムを取り出す。

それは透き通った青紫色の宝石を、卵のような形にして、それを守護するかのように装飾が施されている。普段から肌身離さず持つており、変身する際と、穢れを浄化する際にしか取り出さない。

彼女がそれを手に掲げると、ソウルジエムは彼女の意思に反応したかのようにキラリと光る。そう思ったのも束の間で、光は部屋の中を覆うほど大きく輝きを増していく。

「うおっ、眩し」

「つ！？（高エネルギー反応……！？）」

そして、光は帶となり、彼女の体に収束していき、ほむらの身を光がすっぽりと包んだかと思うと、パシユンツと光が弾け、一瞬で彼女の身に纏っている服や雰囲気が変わっていた。

魔法少女の姿とはいえない人物であるはずなのに、オドオドした小動物を思わせる少女から、凜としたクールな美少女の雰囲気が一変し、他人かと見紛う程の変身を遂げたほむらに二人は目を白黒させた。

「これが変身後の状態よ。私はこの状態のことを、『魔法少女』と呼んでいるわ」

「すつづーな、アニメみてえ」

「こんな事が……」

流石のジエノスとサイタマも、目の前で人が変身すればそれなりに驚くらしい。いくら非現実的な事が起こつても、ここまでファンタジーじみたものはそうそう無い。

S級第二位、エスペーであるタツマキですらここまであからさまにファンタジーな力を行使したりしない。

……約一名変身する変態も居るがここでは触れないでおこう。というか永遠に触れたくない。

「その盾とか服とか、どつから出てきてんだ？」

「変身すると身につけた状態で出てくるわね。私にもこれが何なのかは厳密には分かつてないわ。何ができるかは分かるけど。……そうね、例えばこういう事も出来るわ」

そう言いながら、盾の中から昨日使った弓を取り出す。

「それは今盾から取り出したのか!? それはつまり盾の中は別の空間に繋がっているとか……あるいはその弓が特殊なのか? や、そもそもその弓と盾は……」

「ええと、お、落ち着いてくれるかしら……（ち、近いよお、あのジエノスさんがこんなに近くに……）ええと、あの、ジエノスさんの予想通り、この盾は別の空間へと繋がっていて、自由にものを仕舞つたり取り出したり出来るわ」

そう言いながら、ほむらは飲み終わつたお茶の湯呑を盾に仕舞つたり、取り出したり、昨日使つた弓を取り出したりしてみせた。至近距離のジエノスという緊張のせいか、若干、変身前の雰囲気が顔を出し

ている。

ジエノスはそんな事は毛ほども気にとめず、未知の技術に興味を示しており、サイタマは純粹にマジックでも見ているかのように目を見開いていた。

ちなみに盾の中には弓だけじゃなく重火器や爆弾なんかも入っているのだが、ここでそれを取り出したらジエノスに誤解されそういうのを控えておく。

「そして私の能力の真骨頂なんだけど……ジエノスさんは、昨日私より早く出たのに現場にジエノスさんよりも早く私が着いていた事に驚いていたわよね？」

「そうなの？」

「ええ、事実です。だから俺は、時魔女とは、超スピードで時間を感じさせないほど素早く敵を瞬殺するヒーローだと思っていました」

「それはある意味では正解よ。……ええと、話すより実際に見せたほうが早いわよね……」

言いながら、少しだけほむらは考える素振りを見せた。

能力を見せるには色々と方法はあるが、時間を止めて少し移動しただけでは先程のジエノスのように、目で捉えられないほどの超スピードで動いたただろう？とどこぞの戦闘民族の王子のような勘違いをされかねない。

一番わかりやすいのは彼らにも止まつた時間を体験してもらう事だ。

都合がいいのか悪いのか、彼女の能力には「事前に体のどこかに間接的にでも触れていると、触れている者も止まつた時間の中を行動することができる（尚、その状態で身体から離れるとそいつも止まる）」というものがある。

彼らを止まつた時間の中に招待し、その中で時計を取り出して「はい、時間を止めました。時計を見てください」と言えばわかりやすいかも知れないが、芸が無い。

そして、少し考えた後、ほむらはたまたま手に届く所にあつたペンを手に、顔を上げた。

「ちょっと、私の肩に手を置いてくれないかしら？」

「こうか？」

「何をするつもりだ？」

サイタマはわくわくした様子で、ジエノスはほむらの能力の真骨頂とやらとどう関係があるのか、訝しむような様子であつたが、どちらも素直にほむらの肩に手を置いた。

「（ふああ、ジエノスさんがめっちゃ近い）じゃあ、行くわよ」

機械仕掛けの盾は回転し、内蔵された砂時計の砂が遮断される。

そして、周囲は静寂に包まれる。

その場の空気が固まるといった比喩的な表現ではなく、どんなに静かにしていても聴こえてくるはずの環境音、風の音、それらが全て消え、世界は静寂のまま停止し、動かない。

その上、部屋や外が先ほどと比べると少し暗くなつたようを感じる。だがほむらを含む自分達三人だけは明確に見えるという、妙な空間がそこに広がっていた。

「……え、なんだこれ？」

サイタマも説明無しに明らかに何かが起つていて、というのは理解できたものの、何がどうなつてているのかはこれだけではあまり理解出来ない。

「はい、ではご注目。種も仕掛けもございません」

手品師のような口調でほむらは手にとつたペンを、何の取っ掛りも

ない空中に置いた。置かれたペンはまるでその空間に固定されたかのよう、重力を無視してびくともしない。

「おお？ どうなつてんだこれ？」

「……!! ま、まさかお前……!! いや、そんな馬鹿な！ こんな事が……！」

「そう、この馬鹿げた能力こそ、私の能力の真骨頂」

!?

時間停止。

それが時魔女こと暁美ほむらの持つ魔法少女としての能力だつた。そして、ほむらはその後すぐに時間停止を解除して、余りにも早すぎる移動のトリックや、一瞬で怪人との戦闘に片が付いてしまうことへの説明をした。魔法少女になつていると自信が沸いてきて性格が変わることも。

「うわー、それいいな。移動も一瞬なんだろ？ すっげー便利じゃん」

「まあ、確かに便利だけど、交通機関も停止しているから、自分の足で歩かなきゃいけないのがネックね。免許が取れればバイクか何かを使つてもう少し楽が出来そうなのだけれど」

「いや……だがヒーローという面で見てもその能力は破格過ぎないか？ どんなに離れていても間に合うんだろう」

「……それは少し違うわね。実際に私が動くのは被害が出た後、ヒーロー協会に連絡が入り、そして私の下に連絡が入つて、ようやく時間停止で現場に急行する。だから、必ず間に合う訳じやないのよ」

と言つたところで、そんなシステムなど知らんと言う無知な民間人に、ほむらの力が知れ渡りでもしたら「何故あの時に間に合わなかつたんだ」と言い出す輩が当然のように現れる事も分かる。

「……だからこそ私はこの時を超越した力をヒーロー協会でも極少数の信頼できる人とS級のヒーローにしか教えていないし、これからもそのつもりよ」

「えつ、それ俺達に話しちゃつてよかつたのかよ？」

「S級ヒーローであるジエノスさんには元からいつか教えるつもりだつたし、サイタマさんも……どうせ近いうちにS級に上がつてくるだろうから」

「当然だ」

「いや当然なの？」

まあ、既に実力という面で見ればS級レベルのヒーローの中でもぶつちぎりだと思うけど、とほむらは心の中で付け足す。

「…………あつ、じゃあさ、今からここのスーパーで白菜買つてきてくんね？今、丁度タイムセールで半額なんなつてると思うんだよ。お金は渡すから」

「え、ええ……もちろん、それくらいお安い御用だわ」

……きっと、時間を止められると知るや否やおつかい（パシリ）をさせるような人物は、後にも先にも彼だけだろう。

この後、彼らは三人で仲良く鍋をつついた。

その際、話の流れでほむらがS級三位だと知り「女子中学生にもヒーローランクで負けてる俺つて……」「（その理論だと俺も負けてるということに……）と二人の成人男性が軽くショックを受けていたりしたのはまた別の話だ。

## 海人族編

### 深海からの脅威

サイタマ達との邂逅と鍋を囮んだ日から更に数日が過ぎた。

「我々は深海からの使者である！人間共よ！我ら海人族に地上を明けわだぼはああああああ！！」

いつものようにサイタマは怪人や怪獣を倒し、そしていつものようにワンパンで倒していた。

普段と何も変わらない。だが、原作とは違う点が一つだけあった。

- 
- 1 名無しのヒーローオタクさん  
今C級に凄い強い奴が居るらしいぜ
  - 2 名無しのヒーローオタクさん  
C級（笑）
  - 3 名無しのヒーローオタクさん  
俺も聞いたなそれ、名前なんだつけ
  - 4 名無しのヒーローオタクさん  
忘れたけど超強いらしいよ
  - 5 名無しのヒーローオタクさん  
どんな敵でも一発で終わるらしい
  - 6 名無しのヒーローオタクさん  
嘘くさ
  - 7 名無しのヒーローオタクさん  
A級ヒーローみたことがあるけど流石にそこまで強くねーぞ
  - 8 名無しのヒーローオタクさん  
夢壊すなよ
  - 9 名無しのヒーローオタクさん  
隕石破壊もそいつらしいぞ
  - 10 名無しのヒーローオタクさん

>>>9

嘘乙wwwつくにしてももうちよつとマシな嘘つけやwww

11 名無しのヒーローオタクさん

>>>9

それは流石に嘘だつて分かる

12 名無しのヒーローオタクさん

>>>9

現場にS級ヒーローが4人も居た状態でC級棒立ち、それが現実。  
はつきりわかんだね

33 名無しのヒーローオタクさん

>>>10<13

おまえらひよつとして公式HPブログにあるその時の時魔女さんの報告記事読んでないにわかか? URL貼つてやるからちよつと出直してきて、どうぞ。

(t t l / h e r o . a s s o c i a t i o n . b l o g . n o 2 1  
8 3 < < )

34 名無しのヒーローオタクさんは?

35 名無しのヒーローオタクさんは?

そうやつて俺をだまそうつたつて……は?

36 名無しのヒーローオタクさんは?

そんな餌に俺が釣られクマーフフフ  
……クマアアアアアアアア!??

53 名無しのヒーローオタクさん

>>>33

これまじ?

54 名無しのヒーローオタクさん  
うつそだろ

55 名無しのヒーロー オタクさん  
ええ……（困惑）

89 名無しのヒーロー オタクさん  
いやこれがほんとならなんでこいつC級なんだよ？

92 名無しのヒーロー オタクさん  
▽▽89

いやほんとそれ。さつさとAとかSに上げたれや

93 名無しのヒーロー オタクさん

流石にこれは我らが時魔女たんでも信じられへん

94 名無しのヒーロー オタクさん  
つまんな

102 名無しのヒーロー オタクさん

いや……流石にこんなつまらん嘘つく娘じゃないやろ……普段の  
行い的にも

302 名無しのヒーロー オタクさん

今来たんだけどその噂のC級つてひよつとしてさつき無免抜いて  
一位になつたハゲつていうオチじやねえよな？

303 名無しのヒーロー オタクさん

そうだよ（便乗）

304 名無しのヒーロー オタクさん

なんでホモが沸いてるんですかねえ……でもどうやらほんとにそ  
いつっぽい

309 名無しのヒーロー オタクさん

ただのハゲじやねーか！解散！

「ではその現場に集まつたS級4名の力で隕石を破壊したという事で  
すね」

『いえ、隕石を破壊したのはS級のヒーローじゃないわ』

「え?』

『隕石を破壊したのは、C級の新人ヒーローよ。……貴方達、ちゃんと審査やつてるの?』

「え、流石に、冗談ですよね?』

『つまらない冗談は嫌いよ。そして、質問を質問で返さないで』

「そんな……す、すみません、動搖してしまつて。審査結果はプライベート情報として処理されているので詳しくはお伝え出来ませんが、その、極めて厳粛な審査を……』

『そう、じゃあそれが間違っていたわけね。もしくは彼があえて実力を隠していたのか……何が理由かは分からぬけれど』

このようなやり取りをし、被害状況を報告の後、通信は切れました。これが本当ならC級にとんでもない新人が現れた事になります。

それもS級レベルの……時魔女さんの見間違いじゃなければ、凄い事ですよね。実際のところ、映像や証拠が無いので何とも言えませんが、個人的には、それが本当なら是非その人の今後の活躍に期待したいところです。

(※ヒーロー協会公式サイト、レポートブログから一部抜粋)

世間は、そしてヒーロー協会は、彼の次の行動に注目していた。

鍋を囮んだあの日以降、ジエノスとは(あくまでもヒーローとして)連絡を取り合う仲になり、時々時間を止める盾について解析させてほしい等といったメールが届くようになつた。

これに関しては、解析させるのは別に構わないのだがその間ヒーロー業が出来なくなる上に変身が解除出来なくなるという問題が発

生してしまうので、どのくらいの期間かと聞いたら1年、いや半年と返ってきたので申し訳ないが断らせてもらつた。

だが、そういつたジエノスとのやり取りでクセーノ博士とも面識を持つたのは僕倅だった。

「これは本当に助かるなあ」

そう言いながら、ほむらは自分が今跨っているクセーノ博士からの贈り物を撫でながらニコニコと機嫌が良さそうに笑みを浮かべた。

それは、ほむらの為にクセーノ博士が一晩で仕上げてくれた、籌型の飛行ユニットだ。

棒状の本体に、跨る為のサドルのような部分、そして両端にドローンのようなプロペラ、後部にブースターまで付いており、ほむら一人程度なら余裕で浮き上げられる浮力を持つていて。

最高高度は5000～8000m（ほむらがあまり高い所まで飛びたがらないので、正確な数字は分からぬ）最高時速は60km程とそこまで速くはないのだが、ほむらにとつて速さはそこまで重要ではない。

なんせ自分の足で歩く必要が無いというだけで非常に助かっている。

サイタマとジエノスの前でも度々「時間を止めると交通機関も止まるから困る」等とこぼしていた事からも察せられるように、移動は時魔女というヒーローにとつてある意味一番の敵だった。

悪魔ほむらかアニメ最終話あたりのほむらみたいに背中から羽根でも生えないかと移動の度に考えていた程だ。

これによつて、ほむらは移動がとても楽になり大喜び。町では度々彼女が普通道路の上空をふよふよと空中散歩している姿が目撃され、"時魔女ファンクラブ"が大喜びした。

黒と紫色のストッキングでどんなに頑張つてもパンツは見えないという事が判明してしまい若干嘆いた者が居るらしいが。

こんな素敵な物を開発してくれたクセーノ博士には、なにか困つて

いる事とか無いですかと聞いたところ、最近研究ばかりであまり眠れていないと。実際は研究だけではなくちよくちよくぼろぼろになつて帰つてくる誰かのせいかも知れない。

これにはジエノスも苦い顔であつた。

なので、ほむらはリボンを大量に購入し、全長20m程の長いリボンで博士とほむらの身体を間接的に繋ぎ、時間を停止させ、ほむらと共に久々にたっぷりと休眠をとつてもらつた。

これにはジエノスもにつこりであつた。

そんな理由で、最近はもっぱらコレに跨つて街をパトロールするのがほむらのマイブームである。そのうち黒猫とお話ししたりするようになるのだろうか。それより先に筈に新機能がどんどん詰め込まれて「魔法少女とはなんだつたのか」状態になるのが先だろうか。

「さて、今週の天気予報は、と……」

ほむらはラジオを取り出しながら、そろそろアレが来るはずだ、と考えていた。

アレとはもちろん次の敵、深海からの侵略者、深海王である。

この敵が来る日は割とあやふやで、とりあえず、隕石事件の近日中で、J市が雨の日、という事くらいしか記憶が無い。

なので、こうしてJ市の天気予報を聞いていた訳だが……。

『残念ながら今週はずつと雨ですね～！洗濯物は乾燥機に頼ることになるかもしません！』

……ちくしょうめ！

まあ、いつ來るのか分からぬなら仕方ない。今は自分の仕事に集中しよう。ほむらはラジオを切り、盾の中に仕舞つた。すると、丁度その瞬間、ほむらは上空からヒーロー協会から討伐命令が下つていた怪人の存在に気付いた。

「俺様は爪切りが下手過ぎて深爪し過ぎたストレスから怪人になつた

ツメキリキリ！貴様ら全員深爪に』

ほむらはツメキリキリという巨大化したカミキリムシの足の先端に爪切りのようなものがついた怪人を前に「なんだその理由」と思いながら時間を停止し、箒から降りるといつものように銃火器を怪人を中心四方八方から囲い込むようぶっぱなし、たまたま口が開いていたので、丁度いいとばかりに手りゅう弾を放り込んだ。

たかだか災害レベル虎の相手に、本家の人も人間を辞めた人も真っ青な徹底ぶりであった。

そして時は動き出す。

「してやぼごおおおおおおおおおーーーツ  
「あつ!?」  
「??!？」

「時魔女だ！S級3位の時魔女が来て……もう終わってる!?」

「……た、助かつたぞ！」

「ファンです！あの、一緒に写真を……！」

「おまつ！するいぞ！俺だつて！」

「写真とかはちょっと……あら？」

そんな時、不意に腰の携帯端末から呼び出し音が鳴る。ほむらは時間停止したあと押し寄せてきた人達から離れ、誰も居ない建物の屋上で時間停止と変身を解除した。

携帯を見れば、電話はヒーロー協会からの連絡のようだ。

おかしい。怪人を倒した報告ならいつもここまで早く催促が来ることはないのだが……あるいは、海人族の件だろうか？とほむらは首を傾げながらその通信に出た。

『時魔女君、聞こえるか？』

『はい、どうしました？』

『任務の途中で申し訳ないんだが……君にはJ市に現れた海人族と名乗る怪人達の討伐を頼みたいんだ』

『えつ！あの、他のヒーローは!?』

『ステインガー やイナズマックスが戦っていたが敵の内の一體に敗れた。座標を送るのすぐに向かつてほしい。既にぷりぷりプリズナーが交戦中、そしてジェノスも向かつてているため、協力して事に当たつてくれ』

「そうですか……了解しました。あ、あと、ツメキリキリ？は既に倒しておいたので、他のヒーローを呼ぶ必要は無いですよ」

『あ、ああ、そうなのか！流石は時魔女、仕事の速さはS級でもダントツだな』

「いえ、そんな、タツマキちゃんとかに比べたらまだ……」

ほむらはそんなどうでもいい事を返しながら現状について考えていた。

……ステインガーが既に負けているって？ 既にぷりぷりプリズナーが交戦中、ジェノスが向かつているって……？ で、出遅れた！なんと間が悪い……しかもここからだと結構J市から離れている。こんな雑魚相手の為に出遅れるなんて。

その上よりもよつて金曜日だなんて！

『……時に、時魔女君。……ひよつとしてそれが素だつたりするのか？』

「……あっ、しまった！ すみません、今の忘れて下さい！ では！」  
顔を赤らめながら乱暴氣味に携帯端末を閉じたほむらは、今更ながら魔法少女の姿に身を包む。

「（ジェノスさんと電話するときはいつも変身してなかつたから忘れてた……）……さて」

そして時間を止め、ほむらはJ市へと向かつた。

「へつくち！……」の後J市では雨が降るんだつたわね……すつかり忘れてたわ。……天気予報も見てたのに何で忘れたのかしら……」

それとは別に幸運値があつたら間違いなくE辺りであろう（あるいはスキルにうつかりEXでもついているのか）ほむらは曇り空の下、時が止まっているとはいえ寒さは感じるらしく、肌を震わせた。

そして、停止した土煙や空に舞う瓦礫などといつた戦闘の行われている瞬間の現場が見え始めた。どうやら、ぶりぶりプリズナーと深海王が戦っているらしい。

「……間に合わなかつた……！」

現場に着いたほむらはそう呟いた。それはぶりぶりプリズナーの敗北を意味して居る……わけではない。彼が、既に変身済みだつた為了だ。

S級16位、ぶりぶりプリズナー。

彼を一言でいえば、「A級は一人前、S級は変態」と呼ばれてしまう原因筆頭であり、文字通りの変態である。

無論S級なので恐ろしく強いのだが、まず、ホモである。ホモである（二回目）。

筋肉モリモリマッチョマンの、ホモである（三回目）。

しかも、普段は何をしているかと言うと「我慢できずに気になつた男子を襲つてしまふ為、牢獄の中に居る」。その為ヒーローネームにプリズナー、と入つているのだ。

そして、彼には「エンジエルスタイル」という、この姿を見た者に生きて帰つたものは居ないという変身スタイルが存在する。

それは、筋肉を膨張させ服と言う心の枷を外し、文字通りのフルパワーで敵を圧倒する変身である。

つまり全裸である。

「出来れば……ツ！見たくなんかながつだ……！」

ほむらは、向かつてきた方向が悪くぶるんと回つてソレを直視して軽くえずいた。SAN値チエック待つた無し。ほむらはSAN

値を2失つた。

……一応彼をフォローすると、割と良い筋肉をしているという点だろうか……いや、そういうえばこの時深海王に「醜いわね」と一蹴されていたような気もする。ダメだ。

これがS級の戦いか……俺が負ける要素は無いな、などと考えながら傍でそれを見ていた音速のソニックもこれには青い顔をしていた。原作ではこの後彼も全裸になることになるのだが（意味深）。

……まあ、それはそれとして、だ。

現状どうなつていてるかというと、ぶつちやけ既にぷりぷりプリズナーが負けそうになつていた。「ラツシュつていうのはね、相手を確実に仕留める為に、一発一発に殺意を込めて打つのよ」とか言いだすあたりだろうか。丁度、頸にクリーンヒットしたタイミングで時間停止したらしい。

……彼は、変態だが基本は善人だ。気になつた男子を襲つちやう事以外は。

このまま大けがをするのを黙つて見過ごすのも忍びない。そう思つたほむらは、空中に浮かび上がる程の衝撃を受けたらしい彼の身体を、あまりソレを見ないようにしながら、攻撃が当たらないである場所まで運び、そして時間停止を解除した。

「——んな風、に、アラ？」  
「——ごはあつ！」

そして時間が動き出し、ぶりぶりプリズナーは仰向けにずさあ、と地面を転がり、深海王は突然消えた相手に瞬目を丸くした後、着地すると私と目が合つた。

「……あらあん？ 今度は随分小さな兵隊さんねえ？」  
「なつ！（いつの間に現れた、このガキ！）この俺が、全く動きが見えなかつただと……!?」

「君、は……時魔女ちゃん、か……氣を付ける、そいつ、かなり強い、ぞ」

既に、かなりダメージを受けているらしいふり。ふり。プリズナーは立ち上がりうとして脚に力が入らず膝をついた。

対して深海王は標的を完全にほむらに変えたらしい。獰猛な笑みを浮かべながら口を開く。

「今のはどうやったのかしら？」

「ここで答えたなら、むしろ拍子抜けじやないかしら？」

「それもそうねえ！」

そして深海王がほむらに向かつて飛び出し、拳を振ると同時に、時間停止が発動する。

「（はつ……や!?）」

ほむらの経験上では最速かもしれない。時間停止をするまでのほんのコンマ何秒かの時間で、それは残り数mという所まで接近していた。

これでこの世界では音速のソニックに「遅い」と言われてしまうレベルの速さだというのだからやつていられない。その上、雨が降り始める身体が濡れると巨大化してパワーもスピードも段違いに上がるというおまけつき。こうなると最高速度になつたらある程度離れないで時間を止める前に殴られて死ぬかもしれない。

「……とりあえず、光の弓矢は効くのかしら？」

ほむらは、最初から出し惜しみ無しで光の弓矢を取り出した。これで効かなければ、後はとにかく相手の攻撃を躱して躱して躱しまくつて、ジエノスやサイタマの到着までの時間を稼ぐしかないだろう。

というかぶつちやけ最初から彼らをここに連れてきた方が早い気もしてきた。

しかし、そんな事までしていると流石に時間が無くなる可能性がある、か。そう考えたほむらは、覚悟を決めて、深海王に向けて光の矢

を打ち込んだ。

一方、ほむらと連絡をとっていたヒーロー協会の男は切れた通信をそのままに、NO SIGNALと書かれた画面を眺めていた。

「あんな娘が、S級ヒーロー第三位、か……強い力を持つていてるからという理由で、あんな子供にまで頼らなくてはいけないとは……情けないな、私達は……」

もしほむらがこのセリフを聞いていたなら「違うんです、違うんです」と必死にそれを訂正しようとして更に彼自身の情けなさ、やるせない感情を誘つていただろう。

彼らにとつて時魔女とは「見た目はただの子供だが実は凄まじい超能力者」とか「小学生だが一時期メタルナイトの助手をやつていた程の天才少年」ではない。彼女はヒーロー協会にとつて「不思議な力を持つてているだけの女子中学生」だ。

しかもそれらが全てあながち間違いでもないのがややこしい。

……これは関係の無いことだが、彼らは彼女の「時魔女」というヒーローネームに何の疑問も持たないのだろうか？…………だが実際何の疑問も抱かれていない所を見るに、何も思われていなゐのか…………あるいは「時魔女の時つてなんだよ？」と思う者くらいは居るのだが、それを直接本人に聞こうとする者が居ない、という事なのかも知れない。

そもそもその話、中学生が銃火器を所持していて「いや彼女はヒーローだから」で何の疑問も抱かないような業界である事からもある程度……あつ（察し）というやつである。

……それだけ“中学生でS級ヒーローになつている”という彼女は異質で、ヒーロー協会も扱いかねているのだろう。……という事にしておきたい。

それに加えて今はヒーローネームどころではない、時は一刻を争う事態だ。あのステインガーが、イナズマックスが敗北し、S級のぶりぶりプリズナーが牢獄から出張つてくるだけではなく、期待の新人ジエノスまで駆けつける程の相手。

「時魔女……いや時魔女ちゃん！ 頑張ってくれ……！ 応援してるぞ！」

## 深海の王

万物の母にして、全ての生態系の源である海。

そしてそんな海に棲む種族、海人族の長にして王。  
その名は、深海王。

彼は今、強い憤りと苛立ちを感じ始めていた。

「（一体どういうカラクリなのかしら？）」

拳を振るつた、と思つたら、相手は既にその場から消えており、ピカツと光る何かで撃たれ、気付いたら皮膚をボコボコと抉られ、鋭い痛みが彼を襲つていて。

「こつちよ。ノロマなお魚さん。」

「ぬうううん!!!」

また、だ。確かに捉えたと思ったのに、まるで殴った感触が無い。  
そして、いつの間にか離れた場所にそいつの気配が移動している。

「……幻覚？ それとも、超スピードかしら？」

「さあ、どつちかしら？」

「ツ!! がああ!!」

だがこうしてピカツと光る何かで攻撃されているのだから、幻覚という事は無いハズだ。だが、超スピードで移動しているにしても、移動する前の動作まで見えないというのは一体どういう事だ？ それすら目に捉えられない程のスピードだと言うのか。

それを見ていたぷりぷりプリズナーと音速のソニックも、その戦いに圧倒されていた。

「流石は、時魔女ちやんだ……。」

「あのガキは一体……？」

「ん？ あの子か？ あの子はS級第3位のヒーロー、時魔女ちゃんだ。知らないのか？」

「（S級3位……！）馬鹿な！ この俺の目でも捉えられない程のスピードで動くガキが居てたまるか！ そんな規格外が世の中にそうポンポンと居ていいハズが無いだろう！（）」

音速のソニックは、自分より速く動ける存在が認められなかつた。

そして、同じ感情を深海王も抱いていた。認められない。この深海の王が、目で捉えられない程のスピードで移動する者が存在するなど。

「この深海王の身体に、こうもあつさりと傷を負わせた事には褒めてあげるわ……敬意を表して、貴女は四肢を割いて永遠に暗い海の底で飼つてあげる！」

「（やだ怖い）できるものならやつてござらんなさい。」「んがあああああ！！」

ぽつり。

そして不意に、深海王は振りかぶった拳をピタリと止めた。ほむらと深海王は、同時にある事に気付いた。

「……雨、降つて来たわねえ。」

ポツポツと段々その強さを増していく雨に、深海王はニヤリと獰猛な笑みを浮かべた。

「（まずいっ！！）

「ふん!!」

ブオッ、と深海王が拳を振り降ろし、それを間一髪で時間停止が間に合つたほむらが避ける。ここから先は、更に注意して動かなければならぬだろう。見れば、既に深海王は先ほどまではまるで違うフォルムになつていた。

一応の人性を保つていた先程と違い、今では一回りも二回りも巨大化し、まさに海の怪獣。

無論見た目だけではなく、先程までほむらが立つていた地点にはちよつとしたクレーターが出来ていた。……もし、彼が水を得る事でパワーアップする事を知らなかつたら……そう考え、ほむらはゾッとした。

効くかどうかは分からぬが、光の弓矢で反撃しつつ、そして、十分過ぎる程に離れた後、時間停止を解除する。

「（デカい上に……速い！）」

「……また躲したわねえ？ アラ、今度は随分遠くまで逃げたじゃない？」

「（速い……しかも、多分、盾で防いでも腕一本は覚悟しないと……）  
「妙なカラクリで逃げているみたいだけど、いつまで持つかしらあ？」

実際、そう長くはもたないだろう。深海王は既に彼女が幻の類ではなく、どういう訳か自分でも視認できない程のスピードで動いている、という事を見破っていた。

降つて いる雨が一瞬だけ途切れ て いる箇所がある、という事実に気付いたのだ。それは、ほむらが止まつた時の中 で 移動した、ほんの一瞬の痕跡。更に雨が降れば、足跡で彼女がどこに行つたかを判別出来るようになるだろう。

まさか本当に殆ど一瞬の間でそこまで移動出来るなんて、と深海王は感嘆した。

だがああやつて止まつて いるタイミングもあるし、何より、彼女が放つピカツとする物も、もう痛くない。

なにより、深海王は彼女が何らかの理由でこの戦いから逃げる事は無いと確信していた。ここまで攻防で彼女はあるの妙な能力を使用すれば何度も逃げるチャンスがあつたはずだ。なのにそうしないのは、地上の人間を守護する立場の戦士であり、決して逃げる事が許されない立場なのだろうという事が察せられた。

その上、殴る、躰すという戦闘とも呼べないやりとりをしているうちに、先程のちょっとだけ強かつた男とは見る見る距離が離れつつあり、彼の増援も望めないだろう。

状況は深海王の圧倒的有利にある。

対するほむらもその事実に気づいていた。

……今でも、何度かこんな事があった。

硬過ぎて自分の攻撃がまるで通用せず、いくら時間停止しても勝てないような強敵に、今までに何度も会った。

ある時はタツマキ等に協力を要請した時もある。

ある時は体内から爆破する事で事なきを得た事もある。

ある時はもう諦めて止まつた時間の中で重機を使って持ち上げて溶鉱炉にぶち込んだこともある。

油断が原因で身動きが取れなくなり敗北しかけた事もある。

……危うく死にかけたこともある。

自分じゃなく彼女本人だつたならと思つた事や、他の魔法少女だつたなら、彼女達もこの世界に居たならどんなに良かつたかと思つた事も。

彼女はそもそも常人と比べると『スタート』が遅かつた部類になる方の人物だ。

スタートというのは、体を鍛え始めるだとか、ヒーローを志したという意味でのスタートではない。『普通に生活が出来る、一般人としてのスタート』という意味である。

暁美ほむらというキャラクターを知っていても、これに関しては知られない事が多い、彼女を構成する設定の一つに、「元々病弱で心臓病を患つており、学校にも行けず自然と気弱で後ろ向きな性格であつた」という物がある。

この世界でもそれは同じで、彼女は転生後から今までの人生の殆どは病院で過ごす事となる。

転生前から「底抜けに明るく前向きな性格だつた」という訳でも無かつた彼女は、後に魔法少女として覚醒するということが分かつていたとはい、その退屈で苦痛ばかりが押し寄せる生活に慣れたころに彼女が『眼鏡の三つ編みで病弱、性格は内気でちよつと残念な少女』という設定通りの人物になつてしまふのは自然な流れだつた。

そして一般的には中学生と呼べる年齢になる頃、彼女の枕元に極々当たり前のように置いてあつた『ソウルジエム』によつて、彼女は覚

醒した。

この魔法少女まどか☆マギカとは全く異なる別世界で、ただ一人の魔法少女として。

最初はそれこそ身体能力も物語の過去編に登場する過去のほむら、通称メガほむと同程度で、バールのようなものを振り回すだけで息切れする程の身体能力しかなかつたし、光の弓矢なんかは、そもそも腕力不足で弓を引けず、命中率も10発3中という、絶望的な数値だった。

自分の思うほむらというキャラクター像から離れていると自覚する度、失敗する度、うつかりEXをやらかす度に「自分の事を暁美ほむらだと思い込んでいるJC(笑)」という文字が脳裏よぎつたりするナーバスな時期もあつた。

今でこそ“魔力”の扱い方を覚え、そこらのヒーローに毛が生えた程度の身体能力と、自由に時間を停止出来る能力を完全にマスターし、彼女は自他ともに認める魔法少女となつた。

そこでほむらとして生きてきた彼女はふと思つた。  
別に、ヒーローになる必要はないんじやないか。

原作の人物に会うだけなら自分ならいくらでも会える。

ヒーローのおつかけなんて、今時珍しくもないじやないか。

そもそも原作に暁美ほむらというキャラクターが居ない以上、自分には童帝やメタルナイトのような明確な役割も、ジエノスのような使命も無い。彼らだけでもこの世界が廻る事は確認するまでもなく誰の目から見ても明らかだ。わざわざヒーローになつてでしゃばる必要なんて無いんじやなかろうか。

というか、ヒーローってそもそも必要だらうか?  
だが、それでも彼女はヒーローになつた。

他に幾らでも道はあつたはずなのに、何故?

「(その答えは今も出ていない)」

眼前に迫る深海王の拳。

時間停止は……間に合わない。

「ハツハアー!! ようやく捉えたわよお!」

「クツ……!!」

まるで金属同士を勢い良く接触させたかのような甲高い衝突音が響き、次の瞬間、ほむらはコンクリートの道路を30m近く転げまわる。

「（い、意識が……！たつた一撃でこの威力……!）」

「かゝるいわねえー! 躲せないと見てわざと飛んだのかしら?」

それだけではない。きちんと盾を構え、ガードをしたうえで、ほむらは自分の腕の骨が、あばらが軋む音をはつきりと聞いた。

「……今の私ではこれが限界みたいね。」

「あら? 蹄めちゃつたのかしら? 貴女には手こずらされたから、

せめて良い悲鳴を上げてくれるかしら?」

「お断りよ。」

「あ、ごめんなさい、説明不足だつたわね? あなたに拒否権なんてないのよお!」

もうあのカラクリを使つても自分の拳が届く事は証明された。なら、次はどう甚振るかだ。彼女はどうやつたら気持ちの良い悲鳴を上げ、苦痛に顔を歪め涙を流し、命乞いをするだろうか?

まずは四肢を引きちぎり、臓物を引きずり出すか。いや、それでは呆気なさすぎる。もつと、もつともつともつともつと残虐な方法で……。

「……あ?」

……ふと、違和感に気付き、深海王は標的に向けて駆け出した足をぴたりと止めた。

雨で潤いが戻ったハズの自分の身体に、今も水を供給出来ているハ

ズの自分の筋肉に、耐え難い渴きを感じた。膨らんだハズの自分の身体はいつの間にか先程までの萎んだ身体に……いやそれ以上に乾いているといつていいだろう。

「……これは……」

「……ようやく効き始めたかしら？」

「か、身体が……乾く……！ 力が、抜けて……！ 一体何をお……！」

苦しみながら怨嗟の言葉を吐く深海王を前に、ほむらは「ようやく自分の策が効き始めたか」と嘆息していた。化け物だ化け物だとは思っていたが、しかし、ここまで戦闘を引つ張つてようやくとは。

彼女の策、それは簡単な話で、原作でサイタマが言っていた「ここまでヒーローが怪人を弱らせてくれたおかげで楽に倒せた」を実践してみただけのことだ。

まずどうすればかの深海王が弱るだろうかと考えて、そして彼は雨によつて水分で膨らむと強くなるんだつたなどと思い出し「ならば乾燥させるなりして水分を失わせれば弱るのではないか」と考えた。

それからは語るまでもない。彼女は光の弓矢で彼の身体の表面を削つた後、そこに超強力な乾燥剤を大量に仕込んだり、口が開いているタイミングを狙つて口の中に体内で自然に溶けるカプセル（ガシャポンサイズ）に入つた超強力乾燥剤を大量にぶち込んだりとやりたい放題だ。

次案に海の生き物なら電気に弱そうだからと「超強力電撃コース」、その次に一応生物ではあるハズなのだから少しは効果が期待出来るだろうと「持つてる毒物適当にフルコース」を考案。

そのほかにも、「プラズマカッターで切断と同時に傷口を焼きつぶす」とか……流石にそれはほむらの精神衛生的にあまりにもあんまり案だつたので廃案にしたが、もしこの案を採用しなければならなかつた場合の為に、屋外で高電圧の電気を使える装置とプラズマカッターは既に用意してある、と言つておこう。

今回の乾燥剤だつて、一步間違えれば臭いや違和感で先に気付かれ

てもおかしくはないのだが、気付かれたところで、という話もあるし、戦闘に対する高揚感やほむらへの苛立ちが彼の感覚を鈍らせてしまったようだ。

「(まあ今日は自分で倒すのが目的じゃなかつたから別に必要無いけど)」

「ああああ!! あんたは!! 絶対に許さない!! 必ずぶち殺してやる!!」

深海王にとつて誤算だったのは、目の前にいる少女は、いや、人間とは、その気になればどこまでも残虐になれる種族であり、やろうと思えば一つの種族を滅ぼすことに躊躇いを捨てることができ、目的の為ならどんな手段でも用いる類の生物であつた事。

そして、時魔女と呼ばれるヒーローが、自身の弱点を事前に知つており、その対策をさも当たり前のように取つていた事。

更にもう一つ。

怨嗟の言葉を叫ぶ深海王を前に、ほむらが不意に盾から取り出した傭型の飛行ユニットに跨り、ふわりと浮き上がる。

「!? 今更逃げるつもりイ!? 絶エツ対に逃がさないわよオオオ!!」「まさか。これは合図よ」

合図?と深海王はそれについて口クに考える程の暇も冷静さもなく、体内ウツボを吐き出し上空へと飛び上がつた標的を噛み殺そうとし、そして前方で何かが煌めいている事にようやつと氣付く。

「焼却」

深海王の誤算、その最後の一つは最初からほむらはこの場所……ジエノスがフルパワーの焼却砲を撃つても何の被害も出ない、直線状に何も存在しない道路に誘い込んでいたという事実。

一体いつの間にこの作戦を打合せしていたのかとか、いつからここに誘い込まれていたのか、ジエノスはいつから戦いをみていたのか。様々な疑問が残るが……深海王はそんな些細な疑問を抱く暇もなく、自身の身を覆いつくして余りある巨大な炎に抱かれた。

「ご協力感謝するわ、ジエノスさん」

「いや、構わない」

種明かしをしてしまうとなんてことはない。

ほむらはJ市に向かう前に、ジエノスに連絡を入れ、深海王との現場の場所を送つておいたのだ。次に、現場に着いたジエノスは既にほむらはその現場から離れるように深海王との戦いをしているという事を負傷したぶりぶりプリズナーから聞いた。

そして、戦闘跡を追っていくとほむらと深海王が戦っているのが見えたが、思ったより戦闘が激化しており横やりを入れると彼女の邪魔になってしまふかも知れないと踏んだジエノスは、すぐに飛び出さずに機会を窺う事にした。

そして、一方ほむらは時間停止中に色々と仕込んでいる時、次はどこで時間停止を解除しようかと考え辺りを見回していた所、普通にジエノスを見つけた。

……これに関してはほむらの転生前の人物がジエノス推しだった事も関係しているかもしれないが、そこは些細な事だ。

そうして二人は一度接触し、停止した世界で情報交換した。

深海王が思つたよりも手強く、光の弓矢では削れはするものの再生力に追い付かず削り切れなくなつてきた事、なので、乾燥剤で弱らせることにしたという事。

結果、ほむらは深海王を出来るだけ弱らせ、ジエノスはその弱つたところにフルパワーで焼却砲を叩き込む、という即席の作戦が立案された。

ほむらが準備良く乾燥剤を持っていたことに関しては「銃が効かない液体状の敵に有効なので」という理由で納得した。

雨が降り始めて敵が逆にパワーアップし始めたときは肝が冷えたが、結果としてこうして作戦は成功した。

「これで、倒せているといいんですが。」

「これでダメだつたら先生の力を頼ることになるかも知れないな。」「（あれだけやつてダメとか考えたくないなあ……）」

「お？・あつちか？」

「なつ！？逆方向だつたか！？」

同時刻、J市で（現場へはまつたくの別方向、あらぬ方向へと）走っていたサイタマ、そして正義の自転車乗り、無免ライダーは、J市の一角で大きな爆発音と巨大な火柱が立ち上っているのを見た。

それがジエノスの焼却砲によるものとまでは分からなかつたが、どうもあそこで何かが起こつているという事だけは分かつた。

すぐさま方向転換した無免ライダーは、ペダルに力を入れようとしたところで、爆発地点から炎の帶のような物が、丁度彼らの走つていた道路からビル等の建物を挟んで反対側の道路を焼いたのを見た。

「うおっ！」

「なんだ！？」

ひよつとすれば、これは怪人の攻撃か何かかもしれない、そう思つた無免ライダーはビルの間を通して、炎が焼いた後のプスプスと音を立てている道路に入る。

遠くの爆発地点から直線状にこんな所まで焼いてしまうとは、今回

の怪人は凄まじく強いのかかもしれない……と冷や汗を流した無免ライダーは「いや待てよ？ 今回の怪獣というのは海人族という海に棲む怪獣だつたのでは？ 海に棲む生物が炎を扱うのだろうか？」と首を傾げる。

それはともかくとして、ひとまずはあの爆発地点へ向かつた方がいいだろう。

「とりあえずこの道は避けた方がいいかな……。」

「そうだな……？ おい、ちょっと待て、なんかくる。」

「え？」

熱でタイヤがダメになる事を恐れて元居た道に戻ろうとする、が、そこでサイタマが空から何かが飛来して来るのを見て、その場に降り立つ。

ガゴンッ、と空から飛来したそれは落下地点に大きなヒビを作った後も勢いが止まる事無く少しの間転がつたと思うとベタンッ、と仰向けに静止した。

「こ、これは……。」

「ひょつとしてこいつが例の海珍族つてやつか？」

「そうみたいだね……瀕死みたいだけど。」

それが人型であつた事にようやく気付いた二人は急いでその場に向かうが、それが人間ではない事に気付いた後、これは既に戦いが佳境に近いのかもしれない悟る。

飛来してきたそれはジエノスの焼却砲を食らい吹き飛ばされた深海王その人であり、今や虫の息と言つたところであった。

ここで、ほむらの誤算が二つ。

一つは流石にアレで死なないとは思つて居なかつたことだ。既に虫の息ではあるが、それでも、あの弱つた状態で焼却砲を食らつて原形をどどめて居られるほどとは思つて居なかつた。

ちなみにこれは、「わざと飛び上がる事で衝撃を出来るだけ受け流す」というほむらの技術を真似た事で、直撃はしたもの、こうして

吹き飛ばされることで原型は留めるに至った深海王の咄嗟の行動によるものである。

お蔭でガードの為に使った両腕はかろうじて形が残るかどうかと  
いう程に損傷し焼け爛れており再生には時間がかかるだろうが、肝心の心臓や脳等の重要器官はあまり損傷せずに済んだらしい。  
そして二つ目。

「……うご、が、ごご、ご……!!」

「!?こんなになつてもまだ動くのか……!？」

それは、焼かれた事で、ほむらが深海王に仕込んだ乾燥剤が燃え尽きたらしい、という事だ。それ即ち、水によるパワーアップを封じていた物がなくなるという事。

さらに言えば再生も可能だという事だ。

深海王はグチャグチャとグロテスクな音を立てながら雨による再生を行い、既に立ち上がり、意識にかかっているもやも段々晴れつづある。

「あ、ぐが……！あのアマ……！絶対に、ぶぢごろ、す……!!」

かかつていた意識のもやが晴れた先にあつたのは純粹な殺意。深海王が先の攻撃よりもまず真っ先に思い浮かべたのは、この深海王を出し抜いてあろうことかここまで追いつめて見せた小さな人間の少女を殺す事だつた。

「おう、お前が海珍族か？」

「（……？ なんだこの人間は？）

「ちよつ、君!?」

そんな純粹な殺意に横やりを入れたのは見た事もない人間の男だつた。

何のオーラも感じない、ただの人間が、何故か深海王の前に立ちふ

さがつっていた。

距離を取り、警戒していた無免ライダーは突然、まるで散歩の途中にすれ違った人物に話しかけるかの如き気軽さで立ちふさがついてる（しかも聞いている種族の名称はどこか間違っている）先程出会つたばかりの男の自殺行為とも思える軽拳に驚いていた。

「（邪魔よ！）」

そいつが何なのかは分からない。正直まだなんて言つてゐるのかも良く分からぬ。ただ邪魔だつたので、深海王はそいつに拳を振り上げ、殴り殺そうとした。

それが深海王最後の思考だつた。

「急に殴りかかってきたからつい反射で殴つちまつた……まあ怪人だつたっぽいし、別にいいか。」